新聞　（第３種郵便物認可）

希少種すむ環境大切に

トウキョウサンショウウオ

東松山市のこども動物自然公園園内にあるトウキョウサンショウウオの自生地で、近隣にある桜山小学校の4年生85人が、学校でふ化させたトウキョウサンショウウオの幼生265匹を放流した。同園から自生地にあった卵のうを預かり、児童らが世話をした。学校と動物園が連携した希少種の保全と環境教育を兼ねた取り組みだ。（米山士郎）

「バイバイ」などと声をかけながら、トウキョウサンショウウオを池に放す児童ら＝東松山市内

東松山・桜山小学校　児童らふ化、自生地に放流

トウキョウサンショウウオは日本固有の両生類で、環境省が絶滅危惧種に指定している。近年は気候変動やアライグマなどの外来種の捕食で生息数の減少も指摘されている。同園では、乾燥などで死ぬ可能性もある場所に産卵した卵のうを保護し、桜山小に預けて育ててもらっている。

この取り組みは、同小担当教諭の岡島孝徳さん（61）が前任校時代、同園に提案して始まった。2021年に岡島教諭が桜山小に異動し、現在のようなかたちで行われている。

今年は3月に八つの卵のうを同園から預かった。4年生が全員参加で、毎朝始業前に当番の児童がふ化した幼生に餌のイトミミズをあげたり、水槽の水を取り換えたりしている。授業でも取り上げ、オタマジャクシのような形から手脚が生える様子など、生態の変化を観察している。

放流では児童らが、体長5センチほどに成長した幼生を1人2匹ずつ、自生地の池に放した。女子児童は「育てていて、とてもかわいかった。大きく、安全に育ってほしい」と名残惜しそうに話す。同園のスタッフから、トウキョウサンショウウオの成体は雑木林で生息するため、「良好な水と林の環境の保全が重要」と説明を受けた。

この取り組みで、同校は5月に日本鳥類保護連盟の同連盟会長褒状を受賞した。岡島教諭によると、トウキョウサンショウウオを「学校の自慢」として上げる児童も多いという。また、この取り組みをきっかけに、地元の里山保全団体に家族で参加する子もいる。岡島教諭は「子どもたちに里山保全への理解が進めばいい。また、野生生物に興味を持って、将来生物学者になる子が出てきたらうれしい」と話していた。

児童らがふ化させたトウキョウサンショウウオ